

田主宰 水田光雄近詠

平成27年田誌1・2月号より

秋の蝶

飛行船月の兔の前通る

落書の何語か読めず草の袈

秋の蝶アラビア文字を後戻り

川のぼる鮭に立志のありぬべし

手品には種あり巨峰には小種

積めるだけ積みて嵩なす今年藁

初殻の半日けふるドラム缶

団栗の一つ乗りたる歩道橋

菊の日の振れば音する魔法瓶

懸崖の三分咲きとは落着かず

紫蘇の実を漬けいちにちを母らしく

東京に沖あり鴨の来りけり

那谷寺

銀杏を拾ふ松本楼の裏

窯変にもつてのほかの菊脛

冬来る水琴窟の音やつれ

昼となく夜となく加賀の時雨くる

灯籠の浮足立ちて冬の水

雪吊のゆとりの縄の揺れどほし

雪吊を灯して闇を深めけり

灯籠のつむりを残し雪囲

仰向けの蟹また蟹へ玉霰

寒鰯を囲み競り場の昂れり

石山の石へ吹き寄る冬紅葉

千年の苔へ降り積む冬紅葉